

「知」という字がありますが、口と矢でつくられています。「矢」は速いことを意味するもので、昔は矢より速いものはなかったのです。光陰矢の如しといったように、矢のように速いという形容が、昔からよく使われています。口から早く答えが出てくるということは、頭にその知識が十分にあるということを示しているわけです。

「知」というものは、私たちの頭に入っている知識を総称した字なのです。しかし、この「知」の働きというものは、磨けばもっと偉大な働きをします。この「知」を磨いて、それ以上のものになったときに「智」という字になります。遂に、この「知」が使われないうちで、その機能が衰えてきます。その状態が「痴」です。つまり、これらは元は一つの言葉で、知、智、痴の三つがなければ不完全なのです。ところが国語審議会は、当用漢字を制定するときに「智」の字を削ってしまったのです。

「知」のある人間のことを知者といいます。言葉として知者といえば知者、智者、痴者と三つが考えられるわけです。しかし、当用漢字が制定された昭和22年以後、この智者という言葉はなくなってしまったのです。ですから、今の日本には智者がいないのです。たとえいたとしても、それを表現することができません。漢字がなくなると正しい表現ができなくなるわけです。このように漢字というのは重要な働きをするのです。

教育は、知識を増やすのが目的ではありません。常用漢字の中には「智」という字はないけれど、「智慧」というのは本当はこの字でなけれ

ばならないのです。知識としてはないけれども、ものを解決する能力、それが「智慧」です。そこへもって行かなければならないのですが、学力テストとか入学試験は、知識だけを問題にしています。いかに知識の多い人間を採用するかというのが、今の学校側の姿勢です。

知識というものは、頭の中に入れておく必要はありません。それを取り出す方法さえ知っていればいいのです。いくら頭がよくても、詰め込む知識には限界があります。機械的に知識を詰め込んでも、正確に簡単にそれが引き出せなければ、何の意味もありません。

今は、智慧のある人がいないから、世の中がおかしくなっているのです。頼るのは知識ばかりで、知識を生かす方法、つまり智慧がないのです。

そもそも、現代の教育は、小学校から大学に至るまで詰め込み式に知識を植えつけるだけです。ようやく知識偏重教育の弊害に気づいたのか、就職試験の際に、学歴を問わないとか、面接を重視するということも出てきました。会社にとって大事なものは、知識の多い人間より智慧のある人間です。

ポイント:「書く」ことは自分の思いを表現することなので、少なくとも小学校の中、高学年になってからやればいいのです。作文教育も、小学校一年生からやるなどということは本当に無意味です。